

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 高畑 哲男 |
| 学位の種類 | 博士（経営学） |
| 学位記番号 | 乙第 10 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 31 年 3 月 28 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 2 項該当 |
| 学位論文題目 | リーダーシップは文化を超えるか —松下幸之助とジャック・ウェルチに見る— |
| 論文審査委員 | 主査 樋口 徹 教授 副査 中山 緑朗 特任教授 高柳 秀史 教授 矢作 恒雄 氏(慶應義塾大学名誉教授) 五十子敬子 氏(尚美学園大学名誉教授) |

論文の内容の要旨

本学位請求論文の眼目は、松下幸之助とウェルチという日本とアメリカの代表的な経営者の使用語彙から、二人のリーダーシップの「質」の違いを浮き彫りにすることにある。その前提として、日本とアメリカにあるそれぞれの「文化の壁」がリーダーシップにどう反映しているかもまた本学位請求者・高畑哲男（以下、「請求者」と略記）氏が重要視しているところである。本論文の評価もこの「文化の壁」と使用語彙からリーダーシップの質を明らかにするという二点に絞られているといえる。第 2 章のまとめとして、「良いリーダーシップの条件を満たせば、国、地域、文化を超えて、有効なリーダーシップが発揮できるわけではなく、「文化の壁」が存在する」という仮説を提示している。第 4 章において請求者は膨大な松下とウェルチの文言から形容詞と動詞を分析して、松下とウェルチのリーダーシップの違いの根源は文化に求めることができるとし、個人主義傾向の強いアメリカと集団主義傾向の強い日本では、松下とウェルチがそれぞれの国で成功したやり方が受け入れられるかは疑わしいとしている。リーダーシップを使用語彙から分析するという未開拓な研究領域に踏み込んだ請求者の勇気と努力を称賛したい。

請求者は元来英語学の専門家であり、言語・文化・コミュニケーションを研究してきた。経営学研究科所属という環境に身を置くうちに経営者のリーダーシップに関心を持ち始め、「優れたリーダー」とは異なる文化を超えた普遍的なものではなく、文化が異なればリーダーの優劣の評価基準も異なってくる筈との仮説を抱くようになった。それが本研究を本格的に開始する動機となっている。

第 1 章では先行研究のレビューを行っている。そこでは、紀元前 500 年代の孔子やヘロドトスに遡り現代に至るまでの研究を極めて簡潔にしかも正確に整理してある。それによって、後続研究者にとって極めて有用な章となっている。

第 2 章でリーダーの優劣の基準は文化依存であるという仮説を提示している。先ず Tylo

r(1871)の古典的な「文化」の定義を採用し、その上で Masuda 等 (2008) が行った実験結果を引用し、同じ刺激に対し、日米の異なる「文化」環境の被験者達が異なる反応を示したことに注目している。そのような違いの存在を示唆する Nisbett(2003)の研究結果を補強し、リーダーの優劣の判定基準は日米で異なるという仮説を構築している。

第 3 章は本学位請求論文の方法論の解説である。先ず、観察の対象を、松下幸之助とジャック・ウェルチとし、夫々の著書 2 部づつを言語データとすることを明記している。その上で、本研究で採用するテキストマイニングに関する解説があり、文字認識用の AI ソフトとテキストマイニングに使用するソフト TTM についての記述がある。この章も後続研究者にとって貴重な情報である。

第 4 章には分析方法の解説と実際の仮説検証プロセスの詳細な記述がある。分析方法は言語学分野固有の概念や言葉の定義があるので、それらを解説し、その上で松下とウェルチの著書の分析に入っている。分析の途中で、tf (Term Frequency) と idf (Inverse Document Frequency)の極めて重要な二つの指標についての解説も行っている。

第 5 章で、前章の分析の結果をまとめ、松下とウェルチが「優れている」のは夫々日・米の文化の下での評価であることを導き、仮説が検証されたことを確認している。その上で、Jensen(1976) (ストックオプションの提言) 以降の金融資本主義化した米国産業界の問題、Hofstede(1980)のリーダーシップの文化依存、そして Goleman(1995) の EQ 理論による松下的リーダーシップの有効性など、有力な理論を引用し本論文の結論の盤石さを示すことで、本論文を完結させている。

審査結果の要旨

本学位請求論文は、高畑哲男（1990）「動詞 live に見る文化と社会」『作新学院女子短期大学紀要』第 14 号、pp.257-271、から始まる。本学位請求者・高畑哲男（以下、「請求者」と略記）氏は、高畑哲男（1996）「語彙が語る社会と文化」『作新学院女子短期大学紀要』第 20 号、pp.101-112、高畑哲男（1997）「語彙が語る社会と文化（続）」『作新学院女子短期大学紀要』第 21 号、pp.103-112、高畑哲男（2006）「化粧品英文広告の特徴 —コーパスによるアプローチ—」『異文化研究』第 4 巻、pp.101-123 などの一連の研究を実施してきた。本学位請求論文は、これらの研究成果を踏まえ、文化とリーダーシップに関する論文として纏められたものである。

それでも、本学位請求論文のタイトル「リーダーシップは文化を超えるか」は、非常に壮大であり、再考の余地があると思われる。本学位請求論文では、日本とアメリカの代表的な経営者である松下幸之助とジャック・ウェルチの使用語彙を分析し、日本とアメリカで求められるリーダーシップの違いについて言及しているの、研究対象に合わせる形でタイトルを変更すべきである。そして、母親の影響が強いといわれているジャック・ウェルチと家庭の事情故に苦勞を重ねた松下幸之助というある意味 specific な二人の経営者の使用語彙の比較でリーダーシップに対する文化の影響を論じることには説明が不十分な部分が残されている。さらに、本論文の表現の中で、「論文」と「評論」が明確に峻別できていない箇所、誤字、文献表記の不統一等、細部には修正必要箇所が散見される。審査委員からの詳細なコメントとともに添削が行なわれているので、それらに基づき精緻な修正をした上で、論文最終版を完成させることが必要である。

それでも、紀元前 4～6 世紀頃から盛んであったリーダーシップに関する無数に近い研究の中で、請求者の言語学の視点でアプローチした研究は皆無と言って間違いない。研究アプローチのユニークさだけでも、博士号学位申請論文としての資格は十分あると言えるが、請求者は、そのユニークなアプローチにより二人の世界的に評価されているリーダーを緻密に分析した結果、「良いリーダーシップ」は「文化」に依存するという仮説の検証を完結させている。

請求者の論文は、研究アプローチのユニークさに加え、論文の構成および内容、そしてその結論の説得力からも博士学位請求論文として十分にその要件を充足している。これらの結果を総合的に評価し、更なる分析・検討を要する項目もいくつか残されているが、本学位請求論文は作新学院大学学位規定第 2 条による博士（経営学）の学位に相応しい内容をもつものと判定する。